

解をして邪を捨て、正に帰すると云う一節で本論は終つてゐるのである。

最後に日蓮に対する立正安国論は法然に対する選択集と私は同じ傾向のものではないかと思う。一切経を研讀することは両者には違わず自分の主張することが経典から一致しないだけである。釈尊の御教えに相違ないことはいうまでもない。安国論は斯くの如き時代に斯くの如き日蓮が斯くの如き政府者に向うて注ぎし建白書である。

## 日本に於ける地藏信仰について

——特に六地藏を通じて——

浜 本 昭 良

我が国の仏、菩薩の中に於いて、今日の我々にも、なお一種の親しみを感じさせるものは、俗に「お地藏さん」と呼ばれる地藏菩薩であることは顕著な事実である。この事実から、少なくとも、最近の生活意識の中に、地藏に対する信仰が生きているといつても過言ではない。そ

れは何が故に、或いは、どういう意味をもつて、この様に、一般民間人の精神生活の中に、広く浸潤するに至つてゐるのか。又、これは古く大陸（中国の宗教界）に於いてもあつたものであるが、日本人の信仰の中に入るに至つてどういふ特色をもつて受け入れられ、広められたのであろうか。

この問題を考察するにあつて、現存の様々な変貌した地藏信仰の実態を見る時、たと單に、歴史的に、仏教々義上の地藏の本質的性格を尋ねて、その性格の故に、或いは、その性格のもつ意味においてだけ、日本にも広められたとは解することの出来ないものがある。

例えば我が国の六地藏信仰であるが、特に京都の六地藏は有名である。六地藏の名が我が国での初見は元享訳書十七や今昔物語集十七によると、長徳四年（九九八）四月、周防国の玉祖神宮司惟孝（高）が病みて、氣絶している時、夢中に六地藏を感じし、蘇生後、一字を造つて、彫刻安置したといひ、又、拾遺往生伝下では藤原経実が夫人の為に造立したともいわれる。更に源平盛衰記

などでは、西光法師が発願して七道の辻ごとに六体の地藏を造り、之を廻り地藏と名付けて七箇所（四宮河原、木崎里、造り道、西七条、蓮台野、みぞろ池、南坂本）に安置したともいわれる。然し乍ら、伏見には六地藏が古くからあつたことが知られ、これは仁寿二年（八九二）小野篁が冥土に赴いて、生身の地藏を拝し、蘇生の後、一木をもつて刻み作り、文徳天皇が地藏堂を建立されたものだとか、又、入道信西が之を造つて法雲寺と号したのを後に、清盛が分ちて洛外六所に安置したとも伝えられている。この清盛が保元二年（七五七）洛外六所即ち御泥池、山科、伏見、鳥羽、桂、常盤に伏見の六地藏を移したことが知られるのである。

所で、この洛外六所は地域的に、どれを見ても、京都から他国へ通ずる街道のあつたことが伺われるのである。例えば山科は大津から京都へ通じる入口でもある。

元来、我が国には、外から襲い来る鬼神惡靈などを村境や峠、辻、橋のたもとなどで、防障する「さえのかみ」のあつたことが知られるのである。境にあつて、さえぎ

り守る道祖の神が日本人の古い信仰対象であつたことは、我が国の古代の村落社会が封鎖的であり、排他性の強かつたことを考えてみても、うなずけるのである。即ち、村境が単に隣村との境界であるというよりは、村境から外は、別の世界、異郷であると考え、一步、村境を出れば、もう別の世間であるという古代の日本人の村境に対する觀念が境をさえぎり、守る意味で「さえのかみ」を祀つたのである。

こゝで、地藏とは *Earthguard* の梵名の示すように、土地と關係があり、地神性を有するが、地藏經典に示される如く、堅固の誓力を以て能く一切の衆生の苦を慫慂し、あらゆる災禍を除き、所求の福利を与えて衆生の善根を成熟せしめ得ると信ぜられたから、六道罪苦の衆生未だ尽く成仏しなければ、自ら菩提を取らじと誓願し、そのためには種々の分身となつて、種々の衆生のために、法を説き、衆生に従つて、三乗を顯示して悉く不退地に住せしめる六道能化の菩薩ともされ得る。

こゝに、地藏と道祖神との融通性は、經典に説かれる

地蔵の冥府六道において迷えるものを引導し、現実界に引きもどす働きから、幽明の境の菩薩として、受け取られる可能性が大きかつたであらうし、それから、連想的に現実の境を守るものに強調され、在来固有の境の神の觀念に習合したものと考へ得るのである。

勿論、六地蔵は六道輪廻の思想から出発したものと考へられるが、これが具体化して、六道の辻とか交通の要衝、道路の交叉点に於いて衆生済度の役目をするとして勧請された所に地蔵が我が國の信仰に迎入れられたのではなからうか。

こゝで注目すべきは、村境などに祀られたものが道祖神の例が多いことは別として、地蔵の他に、馬頭観音、庚申塔、三十三夜塔などの石塔や庚申塚が祀られたことである。

要するに、六地蔵が京都の内外の入口に祀られた様に、地蔵を日本人が民間で受け取り、広めるについては、受け取る日本人側に「さえのかみ」の様な古代日本人が有していた村境に対する特殊な觀念から生じた積極的な理

由なり、基盤があつたといふのである。

換言すれば、京都に於いては、東山の將軍塚、西の愛宕山、南の男山、北白川の將軍山を以て帝城守護の防障神としての觀念が伝承しており、その中で、將軍塚が源平盛衰記などに記される様に、延暦十三年（七九四）二月、平安京の開創と同時に皇城鎮護のために、丈八尺の武装の土偶を東山の一角に埋め、王城に事ある時は必ず動搖すべしと封叩を籠めて築かれたものならば、それに平安京を挟んで西山の高峰、朝日峰や北白川の將軍地蔵が祀られているのも、六地蔵が洛外六ヶ所に祀られている例も、古代の防障神信仰に胚胎するものではなからうかと考へられる。

つまり、日本に於ける地蔵信仰には、予て存してきた道祖神信仰との結びつきなどによつて、六地蔵とか將軍地蔵などと呼ばれる日本独特の地蔵信仰の形態を生みだすに至つたのは、勿論、地蔵經典に何ら明示されていないところのものが多く、ひいては、地蔵信仰が日本的展開を見たともいわれ、更にこれは地蔵信仰を受け入れ、

広めるだけの積極的な基盤が日本人の生活の中には存在したのではないかと論ぜられるのである。

# Dutthattthaka-sutta と

## 須陀利経との比較対照について

深 尾 乗 真

Dutthattthaka-sutta (瞋怒八偈経)は現存パーリー語仏教聖典の Sutta-nipata の才四章を Atthaka-sutta というが、それがさらに十六のストタに分れているうちの才三のストタに相当するものである。Sutta-nipata は教蔵中の才五、即ち

Khuddaka-nikaya (小部)の才五に相当し、現在の学問的研究に於て、仏教の多数の諸聖典のうちでも、古く成立したものであるが、それらの才四章 (Atthaka-vagga) と才五章 (Pāṭiyaṇa) とは最も古く成立したものであると認められている。

この Atthaka-vagga に相当するものとして、ク

シャーナ王朝治下の西北インドの在俗信者であつた支那がシナに来て呉の王朝時代 (A.D. 223-253) に訳した仏説義足経 (大. 6. 198, vol. 4, pp. 174<sup>b</sup>-189<sup>c</sup>) がある。義足経は上下二卷一六経に分類され、その才三経が須陀利経である。漢訳には散文の因縁譚が存し、パーリ文 Sutta-nipata にそれは存しないのである。Dutthattthaka-sutta と須陀利経との韻文を比較対照すれば、次の如くである。

Vadanti ve dutthamana pi eke,

邪念説彼短

etho pi ve saccamana vadanti,

解意諦説善

Vadan ca jatan muni no upeti,

□直次及尊

tasma muni natthi khilo kuhinci.

(Sn. 780)

善惡捨不憂

「和訳」一部の人は実に邪念なる意を語り、また実に真実の意を語る。牟尼は生じた語に近づかず、それ故に